

家族介護者のソーシャルサポート希求態度を規定する要因

城戸 由香里¹⁾・園田 直子²⁾

要 旨

家族機能の一つとされる介護機能は、他の集団や組織で代替可能である副次機能と家族のみが行う本質機能があるとされる(石井, 2005)。高齢化, 少子化, 核家族化の進む中, 家族介護者の介護負担軽減のために, 介護サービス, 介護者以外の家族や近隣や友人などによる様々な援助が, ソーシャルサポートとして重要である。ところが, 認知症高齢者を在宅で介護する家族介護者は認知症ならではの介護負担感を抱えているにもかかわらず, 介護サービスを全く利用していない介護者がいるという調査報告もある(荒井, 2002)。一方, 一瀬(2001, 2004)は周囲への支援要請が消極的であること, Harris(1993)は子供たちからの援助は限られているとする男性介護者の特性を報告している。

そこで, 本研究は介護負担の緩衝手段とされているソーシャルサポートを希求する態度に焦点をあてた。デイサービスを利用する在宅認知症高齢者を介護する9名の家族介護者に「求められないサポートとその理由」, 「求められるサポートとその理由」, 「その他」について半構造化面接を行った。その結果, 「求められないサポート」としては, 男性で「情緒的サポート」が, 女性で「直接的サポート」が回答に占める割合が高く, その理由のカテゴリーでは夫には「サポート提供者への遠慮や不足」嫁や娘からは「サポートを過去に求め, 断られた経験」に基づくものがみられた。また, 「求められるサポート」では男性, 女性ともに「直接的サポート」の占める割合が高く, 続柄では, 夫と娘に高かった。その理由については夫や嫁からは家族に比べ, 「専門家のサポート提供者への言いやすさ」が語られ, 娘や嫁からは家族やその他の提供者からも様々なサポートを得ている発言があった。このように, 男女や続柄, 過去のサポートに関する体験など, ソーシャルサポート希求態度を規定する様々な要因があることがわかり, サポート希求に関する課題として存在することが示唆された。

キーワード: 家族介護, ソーシャルサポート, 希求態度, 続柄

問題と目的

介護機能の担い手と介護の社会化

高齢化社会を迎えて, 2000年から介護保険法が施行された。これまで家族機能に依存してきた高齢者介護は少子化や核家族化など社会が様変わりしてきたことを受けて, 「介護の社会化」を図る方略が進められている。石井(2005)は家族機能には他の集団では果たし得ない家族のみが行うことが出来る機能一本質機能一

と, 他の集団や組織で代替可能な機能一副次的機能一とがあるとしている。経済企画庁が20歳以上の成人に対して行った調査(1994)によると, 家族機能(情緒機能, 家事機能, 出産・養育機能・介護機能)の中で介護機能が最も変化してきたものとして挙げられている。養育と介護機能はどちらも大きくとらえると他者を世話する機能であるが, 養育と違って介護には明確な時間的展望や目安を見出すことは一般的に困難であり, いったん介護が開始されると, それを止めること

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

が困難であること、そのため、介護水準を低下させないためには介護者を含む家族の奮闘や、外部の資源の導入など多くの資源の投入が必要になってくる(石井, 2005)と言われている。

ソーシャルサポートとソーシャルサポート・ネットワーク

介護に限らず、人に投入される外部の資源として、ソーシャルサポートがある。ソーシャルサポートとは、Caplan (1974) によって概念化されたものだが、これまで様々な定義がされてきたものの、統一された操作的な定義はいまだ確立されていない(菊島, 2003)。さらに、稲葉, 浦, 南 (1987) はソーシャルサポートが生じる際の送り手と受け手の両者の対人関係の親密性や葛藤の程度、さらにソーシャルサポートの過程にもなって生じる両者の関係性の変化とソーシャルサポートの効果について着眼している。

また、その援助供給源となる対人関係をソーシャルサポート・ネットワークと呼び、福祉学、社会学、心理学などの分野で研究が行われている。田中, 兵藤, 田中 (2006) は岡山県の60～80歳高齢者(女性回収数283通, 男性回収数218通)へ、サポート可能な相手をネットワーク構成員とし、人数と関係など質問紙調査を行っている。その結果、ネットワーク人数には性別や居住形態にはよる差は見られなかったが、質的側面には女性は男性に比べ、連絡頻度が高く、被援助度と満足度が高いネットワークを持っており、より密で支援的なつながりに囲まれていると述べている。

認知症高齢者の介護負担とその要因

増加していく認知症高齢者の介護は介護負担をより困難にさせる要因であることは言うまでもない。Zaritら (1980) は、介護負担とは、「親族を介護した結果、介護者が情緒的、身体的健康、社会生活および経済状態に関して被った被害の程度」であると定義した。米花, 田中, 生川, 谷亀 (2003) は介護負担感尺度を用いた研究の整理を通して、介護負担感に影響を及ぼす諸要因に関する検討を行った。その結果、共通して介護負担感に影響があると示唆されている項目が存在している。介護負担感を高める要因としては「介護者の健康状態が悪い」「要介護者に精神的な問題がある」「要介護者の精神症状が重い」「要介護者のADLが低い」「介護期間が長い」「介護時間が長い」が挙げられた。また、介護負担が低くなる要因として挙げられたのは「介護者が仕事をしている」と「副介護者がいる」であった。この結果から、精神的問題や精神症状といっ

た認知症の問題行動に関連する要因が介護負担感に影響することが推測される。また、荒井 (2002) は家族介護者の介護負担の研究において、認知症高齢者の介護負担憎悪の最大のリスクファクターは認知症の問題行動であり、介護サービス利用を増加させ、介護者の自由な時間を増やすことで、介護負担を軽減することを考えたが、要介護者の3割以上が、障害の程度が重度であっても全く介護サービス利用していないことを調査で明らかにした。

男性介護者の実態

一瀬 (2001, 2004) は調査により、在宅認知症高齢者を介護する60歳以上の男性介護者の介護特性を「①情緒面で強い疲れを感じている男性が6～7割、在宅介護の限界を感じている人が4割。②周囲の人々に対して、あまり積極的な支援要請を行っていないようである。③男性介護者は女性介護者以上に介護を生き甲斐として捉えており、介護に対して高い肯定的価値を抱いている。④公的福祉サービスの利用状況をみても、男性介護者に比べて女性介護者の方が積極的であることがうかがえる。⑤男女の介護者を問わず、介護者自身の体力低下を訴えている。」と述べている。このように、男性介護者は情緒面で高い負担を抱えているにもかかわらず、サポートに対してはあまり積極的でないとされている。Harris (1993) はアルツハイマー型認知症の介護を行う男性介護者(15名)の面接調査より、共通のテーマとして「①「献身」的な介護。②社会的孤独・仲間付き合いの喪失。③対処戦略を持っている(介護のコントロール、レスパイトケアの利用、組み立てられた体制)④達成感。⑤男性に対する特別なサービスのニード(同じ体験を持つ男性同士で語り合う機会の必要性など)⑥子供たちの援助への限られた期待。」を挙げている。

少子高齢化、核家族化していく社会の中で、認知症高齢者の家族介護者が介護を継続していくためにはソーシャルサポートを上手に活用していくことが重要である。しかし、そもそも期待するソーシャルサポートを家族介護者が希求することが行われなければ、ソーシャルサポートの活用は始まらない。これまで、介護負担を軽減することを意義として、ソーシャルサポートについては、介護負担感との関係、影響、その要因などの研究が存在するが、その希求態度に関する研究は少ない。

そこで本研究では、「認知症高齢者」を在宅で介護す

る家族を対象（家族介護者）の、ソーシャルサポートの希求態度に焦点をあてる。まず、第1の目的として、半構造化面接を行い、家族介護者がどのようなソーシャルサポートを求められる、あるいは求められないと考えているのか、求められる、求められないサポートの種類を分類し、整理する。また、それぞれ理由についても、サポートの種類ごとに理由をカテゴリーに分類する。また、もう一つの目的として、それぞれのカテゴリーごとに発言者の性別、続柄の比較を行い、ソーシャルサポートをうまく活用できる支援の在り方を探る知見を得ようとするものである。

方 法

1) 協力者

認知症在宅高齢者を介護するC市、Y市のAデイサービスまたはBデイサービスを利用する家族介護者に各デイサービス相談員より協力を依頼し、同意を求められた10名が協力候補者となった。再度、各々に筆者が研究の趣旨を口頭にて説明した。そのうち1名（体調不良の理由による）を除く9名が協力者となった（内訳は表1）。

2) 面 接

面接期間は平成28年10月～11月、面接回数は各々1回約60分であった。面接場所は各協力者の希望により、5名が自宅訪問、4名が利用デイサービス面談室（個室）にて行った。面接で話された内容は研究以外で使用しないこと、協力者の希望で面接を中

止できることが可能な旨を説明し、了承を得た上で、筆者が協力者の回答を紙面に記録した。面接における主な質問項目は以下の4つであった。①基本情報；表1参照。②介護における求められないサポートとその理由。③介護における求められるサポートとその理由。④その他。なお、面接で使用した語彙について、「ソーシャルサポート」が協力者のなじみが薄く、理解しがたい可能性があるため、「サポート」あるいは「支援」と置き換えて面接を行った。

3) 分析方法

半構造化面接による回答の文脈を参考にしながら、発言内容を1枚ずつのカードにした（以下発言カードと呼ぶ）。分類については、より細かく見ることを目的に項目数の多い田中・兵藤・田中（2002）の分類（「情緒的サポート」「交友的サポート」「直接的道具サポート」「周辺の道具サポート」「情動的サポート」）を採用し、筆者が「経済的サポート」を加え、さらに複数のサポートが混在しているなど、回答者がどのサポートか分からない場合を「その他」とした。それぞれのサポートの定義は田中らに習い、以下のようにした。

- ・情緒的サポート（以下、「情緒的」）：
心配事や愚痴を聴き、励ましてくれる。
- ・交友的サポート：（以下、「交友的」）：
趣味や興味のあることを一緒に話して、気分転換させてくれる。

表1 基本情報と介護状況

ID	性別	年齢	関係 1)	認知症状態 2)	居住状態 3)	介護者の同居人 4)	介護負担感 5)
1	男性	67	夫	中	同居	無	高
2	男性	72	夫	中	同居	無	高
3	男性	61	息子	中	同居	妻、娘	高
4	女性	78	妻	中	同居	無	中
5	女性	77	妻	軽	同居	息子夫婦、孫	中
6	女性	56	娘	中	別居	夫、息子	中
7	女性	69	娘	軽	同居	息子	低
8	女性	56	嫁	中	同居	夫、息子	高
9	女性	69	嫁	中	同居	夫、息子夫婦、孫	中

1)関係：被介護者に対する関係

2)認知症状態：介護者の被介護者の認知症に関する主観的認知症の程度（重度・中度・軽度）

3)居住状態：介護者と被介護者の居住状態

4)介護者の同居人：介護者との同居家族の有無や内容

5)介護負担感：介護者の介護負担感を図る目的でZarit介護負担感尺度を用いた。

「全体を通してみると、介護をするということとはどれくらい自分の負担になっていると思いますか。」

という質問に対する答えで低・中・高に分類した（以下の通り）

低・「全く負担でない」、「多少」

中・「世間並」

- ・直接的道具サポート（以下、「直接的」）：
代わって、介護・留守番をしてくれる。
- ・周辺の道具サポート（以下、「周辺の」）：
買い物や用事をしてくれる。
- ・情動的サポート（以下、「情動的」）：
介護や福祉サービスに関する情報を教えてくれる。
- ・経済的サポート（以下、「経済的」）：
金銭や物品の援助をしてくれる。

結 果

1) 発言カードの作成

発言を分類し、得られたカードは全部で97枚であった（以下、発言カードと呼ぶ）。そのうち男性が47枚、女性が50枚であった。一つの発言で「〇〇に愚痴を言ったり、情報を聞いたりする。」といった複数のサポートが語られた場合は2枚のカードに分けた。以下、「求められないソーシャルサポート」を「希求不可サポート」、「求められるソーシャルサポート」を「希求可能サポート」と呼ぶ。

2) ソーシャルサポートの項目について

1) の発言カードをサポート別に集計し、下記のように整理した。

- ①サポート別発言カード数の男女比較（表2）
「希求不可サポート」と「希求可能サポート」について
- ②サポート別発言カード数の続柄比較（表3）
「希求不可サポート」と「希求可能サポート」について

まず、それぞれのカードが「情動的」「交友的」「直接的」「周辺の」「情動的」「経済的」「その他」のどのサポートに関する内容かを判定し、分類した。さらに男女別、続柄別（夫、息子、妻、娘、嫁）に出現数の集計を行った。

次に、心理学後期博士課程在学の大学院院生3名により「求められないソーシャルサポートとその理由」と「求められるソーシャルサポートとその理由」のそれぞれのカードより、KJ法を用いてカテゴリー分けを行った。

表2 男女別「希求不可サポート」と「希求可能サポート」発言カード数一覧（枚）

	希求不可サポート		希求可能サポート	
	男性(3名)	女性(6名)	男性(3名)	女性(6名)
情動的	12	2	3	6
交友的	0	0	2	3
直接的	4	13	7	10
周辺の	1	3	0	4
情動的	4	1	1	3
経済的	0	2	0	0
その他	12	1	1	2
合計	33	22	14	28
平均/一人	11.0	3.7	4.7	4.7

(n=97)

- 1): 「求められないサポート」を希求不可サポートと表示
- 2): 「求められるサポート」を希求可能サポートと表示

表3 続柄別「求められないサポート」と「求められるサポート」発言カード数一覧 (枚)

	希求不可サポート 1)					希求可能サポート 2)				
	夫(2人)	息子(1人)	妻(2人)	娘(2人)	嫁(2人)	夫(2人)	息子(1人)	妻(2人)	娘(2人)	嫁(2人)
情緒的	5	7	2	0	0	1	2	1	2	3
交友的	0	0	0	0	0	2	0	1	0	2
直接的	2	2	4	4	5	6	1	1	3	6
周知的	0	1	2	1	0	0	0	1	2	1
情動的	4	0	0	0	1	1	0	0	0	3
経済的	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
その他	6	6	0	1	0	1	0	1	0	1
合計	17	16	9	7	6	11	3	5	7	16
平均/一人	8.5	16	4.5	3.5	3	5.5	3	2.5	3.5	8

1):「求められないサポート」を希求不可サポートと表示
 2):「求められるサポート」を希求可能サポートと表示

(n=97)

3) KJ法によるサポート希求態度における理由の 카테고리分け

「希求不可サポートとその理由」と「希求可能サポートとその理由」のそれぞれの発言カードについて、KJ法を用いてカテゴリ分けを行った。その結果、「希求不可サポートとその理由」(表4)では、(1)「サポート提供者への遠慮」・(2)「近隣の中で感じる孤立感」・(3)「サポート提供者の不足感」・(4)「過去にサポートを断られた経験」・(5)「経済的不安感」の5つのカテゴリが、「希求可能サポートとその理由」(表5)では、(6)「サポート提供者への言いやすさ」・(7)「近隣への親密感」・(8)「サポート提供者の充足感」・(9)「未来に対する期待感」の4つのカテゴリが見出された。さらに、その中には下位カテゴリが得られたものもあった。詳しくは表4、表5に示す。それぞれの表の発言例には個人が特定されないよう被介護者を◎◎、家族や友人を○○の記号で表している。

「希求不可サポート」について

(1) 「サポート提供者への遠慮」からはサポートの提供者による「同居家族への遠慮」、「別居家族への遠慮」、「専門家への遠慮」の3つの下位カテゴリが得られた。「同居家族への遠慮」では、介護者自身が他の同居家族全員が介護負担感を強く感じていて、サポートを求めるところではない状態であると感じていること、「別居家族への遠慮」からは結婚して別の家族を得た息子や娘に心配をかけたくない、あるいはかけられない気持ち、「専門家への遠慮」からは仕事として介護のお世話を自分以外にも担っていることへの語りが見られた。

(2) 「近隣の中で感じる孤立感」からは「近隣の態度の変化」、「今までしてきたことへの見返りが無い失望感」の2つの下位カテゴリが得られた。「近隣の態度の変化」では被介護者が認知症であることから、介護者が前に比べ、近隣の人たちが距離を置いていてと感じていること、「今までしてきたことへの見返りが無い失望感」では、今まで近隣に住む介護者たちをサポートしてきたにもかかわらず、自分が介護者になると近隣の人はサポートしてはくれないという失望感が語られた。

(3) 「サポート提供者の不足感」では「具体的提供者の不足感」と「ピアサポートの不足感」の2つの下位カテゴリが得られた。「具体的提供者の不足感」ではサポートを求めたいと思っても誰に求めるのか提供者が思い浮かばないこと、「ピアサポートの不足感」では気軽に介護の苦勞を話せたり、ちょっとしたことでも情報交換ができるのは介護仲間であるという期待感が見られた。

(4) 「過去にサポートを断られた経験」からは「サポートを拒否された経験」と「期待外れのサポートの経験」の2つの下位カテゴリを得た。「サポートを拒否された経験」からは介護者が入院などで物理的に介護ができない状況下で求めたサポートを拒否された経験から二度と人には頼みたくないと思っている語り、「期待外れのサポート」は介護者が求めている内容の個別的な配慮がなく、一般的な回答がされたときの失望感の語りが見出された。ちなみに「サポートを拒否された経験」では、専門家(ケアマネジャー)が介護者に代わって被介護者を介護する一時入所施設を世話してくれたこと、「期待外れのサポート」では介護仲間が個別

家族介護者のソーシャルサポート希求態度を規定する要因

的な配慮を行いサポートしてくれたことなど「求められるサポート」へとこの項目が移行していく経緯が見られた。

- (5) <経済的不安>からは現在は介護保険の制度上、介護にかかる経費がケアマネージャの試算を元に行われていることが一般的であるが、被介護者が重度化した時は、他の家族や友人、専門家に経済的サポート要請はしないため、自分で何とか介護していくしかないという介護者の意志が語られた。

「希求可能サポート」について

- (6) <サポート提供者への言いやすさ>からはいずれも、専門家を提供者とした「経験から得た信頼感」、「未来の期待感」そして「遠慮のなさ」の3つの下位カテゴリーを得た。「経験から得た信頼感」は過去に何らかの理由により得られなかったサポートの代替えとして行われ、うまくいった経験による信頼感が語られた。「未来への期待感」は今まで介護者が一人で背負ってきたので、自分が介護を継続不可能になった場合は、自分の代わりに専門家がしてくれるだろうという期待感が見られた。「遠

慮のなさ」には、得られにくい家族や友人へ求めるサポートと比較すると、専門家へのサポートは求め易いとの発言であった。

- (7) <近隣への親密感>では家族が認知症になったことを介護者が隠さず近隣に話したことで、家族の介護を理解し、手伝ってくれる近隣からのサポートが自分の期待以上に行われていると感じている発言が見られた。
- (8) <サポート提供者の充実感>からは、同居の家族から得られる「家族からのサポート充実感」、愚痴を言うと共感してくれる「介護仲間の存在」、同じ趣味を持った仲間から気分転換のサポートを受けられる「その他の仲間の存在」、専門家から適切なサポートが現在うけられていることから、今後でも得られると感じている「専門家のサポート充足感」の4つの下位カテゴリーを得た。
- (9) <未来に対する期待感>では、「今まで介護者が一人で背負ってきたのだから、介護者に何かあったら、他の家族がしてくれるはず。」という経験に基づかない期待感が語られた。

表4 「希求不可サポート」理由のカテゴリー

概念	下位カテゴリー	定義	発言例	サポート名	続柄
(1) サポート提供者への遠慮	同居家族への遠慮	サポート提供者が求められない状況であると判断している。	家族に介護も助けてもらいたいし、愚痴もいらいけけれど、そんな状態(家族自身の家族負担感が重く)じゃない。	情緒的	息子
		他のサポートがあるためそれ以上は敬求しない。	(同居の)〇〇は介護はしてくれない。けど買い物はしてくれるからね。	直接的	娘
	別居家族への遠慮	サポート提供者へ心配かけたくないという気遣い。	(別居の)王様は近くにすんでるけど、働いてるし、子育ても忙しいから、介護の事は頼まない。	直接的	夫
	専門家への遠慮	自分ばかり迷惑かけられない。他の仕事もある人だ。	ケアマネも他の人の世話もしているのだから、イライラすることをわざわざ電話してまで世話にはなれない。	情緒的	夫
(2) 近隣の中で感じる孤立感	近隣の態度が変化	家族が認知症であることから孤立感を感じる。	近所との関係は変わらないが、〇〇の認知症を知っているので距離を置かれていような気がする。	不明	夫
	今までしてきたことへの見返りが無い失望感	今まで近所に尽くしたのに自分が受ける立場になったら助けてくれない。	料理が好きだから昔はいっぱい作って近所に配ってたのに、いざ介護してるとなると誰も何も持ってこない。	周辺的	娘
(3) サポート提供者の不足感	具体的提供者の不足感	誰に相談してよいか思い浮かばない。	助けてほしいと思ったが誰も思いつかない。	不明	息子
	ピアサポートの不足感	小さな悩みでも遠慮なくお互い話し合える介護仲間がいない。	介護仲間がほしい。いない	不明	夫
(4) 過去にサポートを断られた経験	サポートを拒否された経験	サポートを求めたが相手から拒否されたなどの経験から2度とは頼まないと考えている。	自分が入院の時に(別居の)介護を一人暮らしの〇〇に頼んだ。私は嫁で〇〇は自分の母親なのに断られた。	直接的	嫁
	期待外れのサポートの経験	サポートを求めた相手から期待通りのサポートが得られなかった経験。	福祉用品はケアマネに聞いたら、品質はいいかもしいけれど値段が高かった。それ以来、ケアマネには聞かない。	情報的	嫁
(5) 経済的不安	将来への経済的不安感	今あるお金でやりくりして、将来もお金のことは自分でやっつけようという決意。	もっと被介護者が重度になったら、家で最期までと思っている。施設に入れたらお金かかるでしょうが(他は私わん)。	経済	妻

表5 「希求可能サポート」理由のカテゴリー

概念	下位カテゴリー	定義	発言例	サポート名	続柄
(6)サポート提供者への言いやすさ	専門家への経験から得た信頼感	過去に期待通りあるいは期待以上のサポートが得られた経験。	自分の入院中の◎の介護を○に断られたのでケアマネが全てしてくれて助かった。	直接的	嫁
	未来への期待感	将来必要になるサポートは専門家に頼める。	自分がもし救急車で運ばれたら、自分がこの家になくなったらホームに入れるべきだと決心した。	直接的	夫
	専門家への遠慮なさ	専門家には他の人より遠慮しない。	ケアマネやデイサービスの職員さんに頼んだり、愚痴を言う事にはハードルはない。	情緒的	息子
(7)近隣への親密感	近隣への信頼感と期待感	家族が認知症であることを近隣にオープンに話したことで近隣が助けてくれる。	近所の人に「◎は認知症」と曝さず言ってからは皆が助けてくれる。	その他	妻
(8)サポート提供者の充足感	家族からのサポート充足感	同居の家族が自分を気遣いサポートしてくれる。	月曜から金曜までは墨間◎の面倒を見るので土日は(同居の)◎か◎がご飯を◎のところへ運んでくれる。	周辺の	娘
	介護仲間の存在	介護の事はちょっとしたことでも愚痴を言ったり、情報交換できる介護仲間がいる。	宗教の仲間で介護している人に介護用品の安いものを教えてもらう。	情動的	嫁
	その他の仲間の存在	趣味などを通して気分転換ができる仲間がいる。	○○仲間がいる。○○をしているときは気分転換できる。	交友的	夫
	専門家のサポート充足感	現在利用している介護サービスで自分の生活が助かっている。	デイサービスがあるからその間に買い物や用事ができるから助かる。	直接的	妻
(9)未来に対する期待感	経験のないサポート期待感	今は何とかするが自分が介護できなくなったら頼めると思う家族がいる。	頼んだことはないがどうしても時は○に頼むと思う。	直接的	夫

考 察

結果で得られたそれぞれのカード数の合計は「希求不可サポート」55枚、「希求可能サポート」42枚であった。男女別に内容を見てみると、「希求不可サポート」においては、男性では情緒的サポートが高く、女性では直接的道具サポートが高かった。それとは逆に「希求可能サポート」において、男性は直接的道具サポートが高かった。さらに属性から見ていくと、夫や息子の発言では「希求不可サポート」の中で情緒的サポートの割合が高く、嫁では「直接的道具サポート」が高かった。また、KJ法から得られたカテゴリーの中には、「サポート提供者への遠慮」と「サポート提供者への言いやすさ」、「近隣の中で感じる孤立感」と「近隣への親密感」、「サポート提供者の不足」と「サポート提供者の充足感」など「希求不可サポート」の理由と「希求可能サポート」の理由の両方に類似した項目が相反して出現していることもある。そこでそれぞれのカードの発言者に目を向けると、属性に特徴がみられた。

この理由に関して石井(2005)は、高齢者への介護意識に関する実証的研究を行っている。その中で、20

歳から60歳台までの介護世代がいずれも最も望ましい介護方法としては、公的サービスを利用して家族介護を行う事とし、それに対して70歳以上の高齢者は、家族のみによる在宅での介護を最も望ましい介護と評価し、公的サービスを用いて介護を行う考え方には低い評価を行い、ここに世代間に有意なズレがあることを明らかにした。さらに、70歳以上の年代は家族の中で介護を当たり前のこととして行われていることを体験し、社会福祉に対しては貧困層のための救済的な措置として受け取る意識の中で育ったことがこのような希求態度の違いに影響している可能性があるとして述べている。本研究の協力者のうち、夫や妻はこの70歳代以上に属することから、その背景が回答に反映したとも推測される。

米花ら(2003)は、介護負担感に関する研究を整理し、介護負担感が低くなる要因として、「介護者が仕事をしている」と「副介護者がいる」を挙げている。退職を迎え、その後、妻を介護する夫婦二人の世帯ではその両方の要因を持たないことがソーシャルサポート希求態度に影響する可能性も考えられる。一般的に、仕事をしている男性は、家庭にいる女性より、近隣と

の関係が希薄であることが想像される。そこで、在職中関係が希薄であった近隣へ、夫がソーシャルサポートを求めにくいことは考えられる。

夫の「希求不可サポートとその理由」の発言カードを見てみると、他者に迷惑をかけることを遠慮して、求めることをしなかったり、求める相手が家族、今いる友人、介護の専門家ではない他の誰か（介護仲間）に求めたいと感じたり、そもそも相談相手が思い浮かばないとしている。石井の述べている、生きてきた時代の背景が理由に感じられる。また、野口（1991）は高齢者調査にて、男性がサポートによって自尊心が傷つく可能性がより高く、サポートのネガティブな効果がポジティブな効果を相殺する可能性があるとして指摘している。更に、夫たちのカードに出現した「介護仲間」に求めているのは、「サポート」そのものというよりは「情緒的一体感」であるというのも一つの解釈と言える。浅川・古谷・安藤・児玉（1999）は「高齢者の社会関係の構造と量の研究」において、在宅高齢者の調査を行った。その結果、高齢者と他者との一対一の間関係を単位とする分析により、高齢者の社会を構成する「サポート」と「情緒的一体感」のいう2つの次元が抽出され、さらに「情緒的一体感」がより基礎的な次元であると考えられるとしている。

また、夫の、ソーシャルサポートの構成員を示すソーシャルサポートネットワークの視点から考えると、兵藤・田中・田中（1998）は個人の有する私的サポート資源を活用するには、ソーシャルネットワークの規模が高齢化と共に縮小化し、限界が生じてくると指摘していることがあてはまる。兵藤らはそのために、それらの機能を代替する公的なサポート（公的機関から提供される物質的、心理的サービスをいう）が必要と考えられるとしている。

一方、嫁の「希求不可サポート」の中では「直接的道具サポート」の割合が高かった。嫁は介護そのものを時々変わってくれる「直接的道具サポート」を求めているが、たいていは介護サービスやそれにかかる金銭的決定権は夫（被介護者の息子）やその兄弟に委ねられていることがその理由の背景にある可能性が考えられる。「直接的道具サポート」については、サポート希求先とサポート提供者として期待していた家族からサポートを得られなかった場合、介護の専門家へ希求先を変更している回答が見られたが、ここには経済的負担（介護サービスを利用すること）が発生すると予測されることから、金銭の問題抜きでは容易に希求できないハードルがある。

また、「希求可能サポート」では、介護者に被介護者以外の家族が同居している場合、自然に「副介護者」を得ているようで、「直接的道具サポート」はないものの、「周辺の道具サポート」「情緒的サポート」などを受けていると想像できる。ただし、介護負担が介護者だけでなく、他の同居家族にも重く感じられている場合は、同居家族からの負担が介護者にとっては重く感じられて、それが「希求不可サポート」へ繋がる逆のケースも存在した。

回答の中で、同じ宗教を信じる介護仲間への信頼感がうかがえる回答があった。平成23年に社団法人全国国民健康保険診療施設協議会が行った「家族介護者の実態と支援方策に関する調査研究事業 報告書」のクロス集計で「地域との関わりあい」の男女比較がされている。介護者の地域との関わり合いと介護者の介護負担感について、男女ともに「お寺の住職、教会の牧師等」の宗教者とのかかわりを持つことで負担感が低かった。この結果は、本研究における「サポート提供者の充足感」に分類されたサポート希求態度とも関係する可能性がある。

ソーシャルサポートネットワークの機能の供給と代替性についての研究においてはCantor（1979）の「階層的補完モデル」とLitwak（1985）の「課題特定モデル」がある。「階層的補完モデル」とは構造的機能主義の立場からソーシャルサポートネットワークをとらえようとするもので、夫婦関係や親子関係の中で本来充足されるような機能が、何らかの理由で充足されない場合、その機能を果たすための関係として、次に近い関係、そのまた次に近い関係と、順に選択されていくとみるもので、Cantorはこの考え方を高齢者のネットワークに当てはめて、高齢者は配偶者、子供、兄弟、親族、友人、近隣、公的組織という階層に従ってサポート供給源を選択し、不可能ならば次点のカテゴリーが補完的にサポートすると仮説した。これに対して、Litwakの課題特定モデルとは、個々の課題で求められるサポートの性質も異なるため、あるサポートと適合性の高い社会的カテゴリーの人々が、そのサポートを提供しやすいとする考え方である。この発想の背景には、現代社会の家族機能は核家族中心の大衆家族でその機能は解体したとする見方に対抗して、たとえ別居しても機能的には拡大家族の絆がむすばれているという考え方がある。Litwakは高齢者研究にこの仮説を用いて、夫婦、親子、兄弟、近所、友人など、それぞれの関係にはそれぞれ固有の課題があるのだと述べ、サポートの分化を想定している。ここでは特定の人々が特定のサポー

トを効果的に授けているとみるので、全てのサポートにおいて家族が最上位であるとは仮定しない。田中ら(2002)はこの2つのモデルを研究視点として用いて、在宅介護者のソーシャルネットワークについて、その機能をサポート供給と代替性という視点から検討している。介護者のソーシャルネットワークのサポート提供機能を考えてみると、供給源の機能分化は課題特定モデルに合致する知見であるとしている。直接的・周辺の道具サポートは家族に集中し、情緒的サポートも家族の比重が高く、交友的サポートは友人が、情報的サポートは介護専門職が最多であった。しかし、今回の半構造的面接からは必ずしも一致した内容を得ていない。

そこで浦(1987)の、ソーシャルサポートが生じる際の送り手と受け手の両者の対人関係の親密性や葛藤の程度、さらにソーシャルサポートの過程にともなう生じる両者の関係性の変化等がソーシャルサポートの効果に大きく影響を及ぼしているとの指摘がこの結果のヒントになると推測される。

本研究では、ソーシャルサポートの起点である介護者の希求態度に焦点をあて、聞きとり調査を行ったが、そこには、家族介護者自身の生きてきた背景やサポート提供者の関係性、過去の経験が希求態度を決めていく要因になっていることが示唆された。子供たちと別居している老老夫婦、一人で親を介護している未婚状況にある子供など、家庭の構造が変化していく中、その要因は個性が非常に高い側面もあるが、夫、嫁と行った続柄によって予測できる要因もあり、種々の要因の個性と一般性の整理などの研究を進める必要性がある。

追記として、その他の回答からは、9名全員が「介護から逃げだそう」や「介護をもうやめたい」とは思っていないことが告げられた。その中には夫の「認知症でも、介護が大変でも、いないと寂しい」や妻の「被介護者に助けてもらうこともある」といった被介護者が依然家族であることを感じさせる発言を聞くことが出来た。これらの発言から、サポートとは別の被介護者への意識の存在も認められる。それらが、サポート希求態度にどう影響するかも、研究が必要である。さらに、数名からは今回、筆者に答えることで、気持ちがスッキリしたとの感想が述べられた。

引用文献

- 浅川 達人・古谷野 亘・安藤 孝敏・児玉 好信(1999). 老年社会科学 第21巻第3号
- 荒井 由美子(2002). 家族介護者の介護負担 IRYO Vol. 56 No. 10 (601-605)
- Canter (1979). Neighbours and Friends. An overlooked resource informal support system. *Research on Aging*, 1, 434-463
- Caplan, G. (1974). Support systems and community mental health. Behavioral Publications.
- 近藤喬一・増野肇・宮田洋三訳(1979) 地域ぐるみの精神衛生. 星和書店
- Harris, P. B. (1993). The Misunderstood Caregiver? A Qualitative Study of the Male Caregiver of Alzheimer's Disease Victims, *Gerontologist*, 33, 4
- 兵藤 好美・田中 宏二・田中 共子(1998). エイジングストレス・サポートモデルによる高齢者の精神的健康に関する実証的研究 健康心理学研究 Vol. 11, No. 1, 1-15
- 一瀬 貴子(2001). 在宅痴呆症高齢者に対する老老介護の実態とその問題—高・齢男性介護者の介護実態に着目して— 家政学研究 Vol. 48 No. 1 28-37
- 一瀬 貴子(2004). 「介護の意味」意識から見た、高齢配偶介護者の介護特性—高齢男性介護者と高齢女性介護者との比較— 関西福祉大学研究紀要 7号 75-90
- 稲葉 昭英・浦 光博・南 隆男(1987). ソーシャルサポート・サポート研究の現状と課題 哲学, 85, 109-149
- 石井 京子(2005). 高齢者への家族介護に関する心理学研究 風間書房経済企画庁(1994). 国民生活白書 80
- 菊島 勝也(2003). ソーシャルサポートのネガティブな効果に関する研究 愛知教育大学教育実践センター紀要第6号, pp239-245
- Litwak, E. (1985). Helping the elderly : The complementary roles of informal networks and formal systems. New York: Guilford Press
- 野口 裕二(1991). 高齢者のソーシャルサポート : その概念と測定 社会老年学, 34, 37-48
- 田中 共子・兵藤 好美・田中 宏二(2002). 在宅介護者のソーシャルサポートネットワークの機能—家族・友人・近所・専門職に関する検討— 社会心理学研究 第18巻第1号 39-50
- 田中 共子・兵藤 好美・田中 宏二(2006). 高齢化社会における共生への示唆(3) : 日本の高齢者のソーシャルサポート・ネットワークにおける構

造的特性岡山大学大学院文化科学研究科「文化共生
学研究」第4号
米花 奈央・田中 千枝子・生川 善雄・谷亀 光則
(2003). 東海大学健康科学部紀要大9号 39-50

Zarit SH, Reever KE, Bach-Peterson J(1980). Relatives of
the impaired elderly; Correlate of feelings of burden,
Gerontologist 20 649-655

Factors related to the attitudes toward social support seeking by family caregivers

YUKARI KIDO (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

NAOKO SONODA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

The purpose of this study was to collect the factors related to the attitudes, when family caregivers seek for social supports. Nine family caregivers who take care of dementia elderly persons at home were interviewed. The questions were about 1) the social supports you cannot seek for and those reasons (called "unable supports" and "unable reasons") and 2) the social supports you can seek for and those reasons (called "able supports" and "able reasons"). First we categorized the results answered about supports into 6 social support types ("A. emotional support", "B. companionship support", "C. direct instrumental support", "D. indirect instrumental support", "E. informational support", "F. economical support"). Next KJ method was employed to analyze the results mentioned about the reasons. We got 5 "unable reasons" categorized. Those were named as "Hesitation to the social support givers", "Isolation among neighborhood", "Lack of social support givers", "Experiences they had been refused by social support givers", "Anxiety for money". In "able reasons" we got 4 categorized group. They were named "Affability to social supporters", "Close feeling to neighborhood", "Satisfaction to social support givers", "Expectation in the future". In the study we found the factors and differences of caregivers' attitudes for support seeking and more researches for social support seeking are obliged.

Key words: Family caregiver, attitude toward social support seeking, family relationship specificity